

第35回平和祈念展示資料館の運営に関するアドバイザリーボード 議事要旨

1 日時：令和4年1月27日（木）10:00～12:00

2 開催方法：WEB会議

3 出席者：（委員）

◎黒沢 文貴（東京女子大学現代教養学部教授）

○戸谷 好秀（独立行政法人統計センター特別参与）

兼川 真紀（弁護士）

亀井 昭宏（早稲田大学名誉教授）

齋藤 靖二（神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館長）

[敬称略、◎は座長、○は座長代理]

（総務省）

七條 浩二 官房審議官

小原 邦彦 管理室長

4 議事次第

- ・令和3年度業務実施状況について
- ・令和4年度事業計画について

5 議事要旨

令和3年度平和祈念展示資料館運営業務実施報告書（見込み）を委託業者から報告。続いて、令和4年度平和祈念展示資料館の運営業務委託の概要について事務局から説明。その後、委託業者から令和4年度平和祈念展示資料館運営事業計画について説明があり、質疑応答が行われ、最後に意見交換が行われた。

委員の主な発言等は以下のとおり。

- 労苦を味わった方々が戦後日本に帰ってきてどのような活躍をしたのか、今我々が知っている事にその体験がどう活かされたのかを伝えることで、戦争がもたらした歴史的体験が若い人にリアリティを持って受け入れられるのではないか。
- 新規の見学者と同時にリピーターを増やすことが重要。受け手が何を知りたいのか、見たいのかなどの希望をくみ取り、オンデマンド型の資料館の形にしていくのがよいのではないか。

- それぞれの地方に残る戦争の記憶を活用した館外企画展の動員が好調だったのは、コロナ禍でオンライン活用によるプログラムが飽和状態の中、実物を求める動きがあるからではないだろうか。

- ロゴマーク・愛称の検討は、資料館の認知度を高めることにつながるので重要だろう。

- ロゴマーク・愛称を公募すると類似のものが多く出てくる可能性がある。著名な方のアイデアで作ってもらうのもよいのではないか。

- オンライン平和学習支援プログラムは、いろいろな館の活動に波及する今後重要な事業となりうるので、資料館の活動の柱として育てていくことが大事だろう。

- オンライン平和学習支援プログラム、貸出しキットを通して、学校で擬似的博物館体験ができることは、子どもたちの将来にとって、博物館の意味を考えるよい体験になるだろう。

- 新規性を盛り込んだ具体性のある新年度の事業計画を立てている。オンライン授業の取り組みに加え、専門分野に踏み込んで、専門性の付加価値をつけていくことは、職員のモチベーションにもつながるのでよいのではないか。

- Web の活用においては、年配者には分かり易く簡単に入ってもらえるような、また、若い人には興味関心を喚起するような、ターゲットの利用度合いを意識した、共感を得られる展開を行っていただきたい。

（ 本議事要旨は、総務省大臣官房総務課管理室において作成した。
速報版であり、今後、修正する場合がある。 ）